

江戸城関係絵図解題①

高橋 喜子

はじめに

本稿は、国立公文書館（以下「当館」という。）所蔵の資料のうち、内閣文庫に由来する資料の中から、江戸城に関する絵図について、書誌情報及び内容を解題として紹介するものである。江戸城関係絵図は、東京都立中央図書館、東京都江戸東京博物館をはじめとして、各地の図書館、博物館等に所蔵されている。当館でも約五〇点（江戸城関係の絵図であることが判明している資料のみ）を所蔵しており、広く一般の利用に供するため、ここに解題を掲載する。

調査対象資料は、『改訂 内閣文庫国書分類目録』の「地理（城図）」と当館デジタルアーカイブ（DA）から抽出した。DAは、「江戸城」、「本丸（西丸、二丸、三丸）」、「御殿」、「江戸」、「図」等のキーワードを組み合わせて検索し、検索結果の中から対象資料を抽出した。

【書誌】について、資料一件につき複数点の資料がある場合には、資料の冊次に基づき、①、②等の番号を用い、それぞれ区別して記載した。「旧番号」とは旧整理番号を指し、資料に添付されたラベル、もしくは資料の印記に表示されている。主な参考文献の書誌情報は文末に記すことにし、解題においては著者とタイトルのみ記載する等、表記を略した。なお、資料において旧字体ないし異体字で表記されている場合、固有名詞等を除き、基本的に新字体に直して表記した。

江戸城関係絵図の概要

当館所蔵の資料のうち、内閣文庫に由来する江戸城関係絵図は、多聞櫓文書とそれ以外の大きく二つに分けられる。多聞櫓文書の中の江戸城関係絵図は、江戸城の多聞櫓に残された文書群（多聞櫓文書）の中に含まれるもので、主に、江戸時代後期から幕末頃、幕府内で作成された絵図面である。断簡の状態の図面が多く、正確な場所を特定することは容易ではないが、興味深い図面が多数残されている。一方、多聞櫓文書以外の江戸城関係絵図は、主に、明治時代以降、諸官庁によって購入ないし謄写により収集された絵図、浅草文庫旧蔵の絵図、書誌学者であった長沢規矩也旧蔵の絵図等によって構成されている。諸官庁由来の資料は、太政官文庫から内閣文庫の時代にかけて諸官庁の所蔵資料が移管され、当館に伝わっている。浅草文庫は、浅草蔵前八番堀に設けられた官立の公共図書館で、その蔵書は昌平坂学問所と和学講談所の旧蔵書を中核としており、浅草文庫の蔵書の多くは当館に引き継がれている。また、長沢規矩也旧蔵の絵図について、当館所蔵となった経緯は不明であるが、蔵書印から判断するに、内閣文庫時代に受け入れたようである。このほか、寄託資料の中にも江戸城関係絵図が存在する。

今回は、後者の多聞櫓文書以外の江戸城関係絵図、及び寄託資料の解題を掲載する。前者の多聞櫓文書の中の江戸城関係絵図については、稿を改

めて紹介する予定である。

〔一〕江戸城旧本丸及二丸之図 「請求番号 一五一・〇一六六」

【書誌】

〔外題〕「旧本丸及二ノ丸之図」（中央無辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕疊物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕金茶色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕七六・五×八〇・五糎（折畳時二二・八×一六・九糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕千分一比例尺

〔印記〕「日本政府図書」、「内務省文庫印」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 四四二五九号

〔備考〕手書彩色、貼紙あり

【解題】

明治前期の江戸城本丸及び二丸の跡地の絵図。堀や門、城壁が精密に描かれている。絵図面に添付された貼紙には、「板張ノ庫」、「上等土蔵」、「事

務所」、「廿」とある。E字型の内務省地理局測量課の建物が記され、その周囲には赤い線が引かれている。『公文録』等によれば、明治一二年（一八七九）、内務省地理局測量課の用地として麴町区紀尾井町六七番地を買い上げ、翌一三年には、その用地へ事務所等の建設が決定されるが、建設に莫大な費用を要することが問題となり、同一四年、旧本丸天守台地に測量台を設け、事務所も併設するという方針へ転換した。本図に描かれた測量課の建物は、すでに建設された建物か、建設予定図か、判断しかねるが、測量台の建設地が再検討される明治一三年以降の絵図とみてよからう。なお、『公文録』のうち「測量台位置ノ件」（請求番号 公〇二九七五一〇〇・〇一三）には、本図に類似した、天守台付近の拡大図が綴じ込まれている。

〔二〕申合留之内書抜絵図 「請求番号 一五二・〇〇九六」

【書誌】

〔外題〕①「宝暦四戌年方申合留之内書抜絵図 乾」

②「文政元寅年方申合留之内書抜絵図 坤」

（いずれも中央直書墨書）

〔内題〕なし

〔形態〕横帳

〔数量〕二冊

〔表紙〕金茶色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕一五・五×二二・七糎（①、②とも）

〔丁数〕①一八四丁 ②一七二丁

〔印記〕「日本政府図書」(①)、「修史館図書印」(①)②、「内閣文庫」(②)

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕太政官正院歴史課・修史局・修史館・内閣臨時修史局

〔旧番号〕和書 三五九三一号

〔備考〕手書彩色、付箋あり、虫損部修復跡あり(②)

※年代記載等は、収録されている絵図ごとにそれぞれ異なるため省略。

【解題】

江戸城内における儀式の際の位置関係、御殿の修復による仮部屋の設定や部屋割りの変更、御殿修復中における儀式の際の仮部屋や動線等について、当該箇所の部分的な絵図面を年代順にまとめたもの。①「宝暦四戌年方申合留之内書抜絵図 乾」は、宝暦四年(一七五四)二月一日日から文化一四年(一八一七)十一月三日までの絵図を収め、②「文政元寅年方申合留之内書抜絵図 坤」は、文政元年(一八一八)六月二日から天保一三年(一八四二)二月七日までの絵図を収めている。絵図には必要に応じて、付箋の添付や彩色が施されている。

〔三〕江城図(「日本分国絵図」所収)

〔請求番号〕一七六・〇二八二 冊次六一

【書誌】

〔外題〕「武州江城図」(中央後補無辺題簽に墨書)

〔内題〕なし

〔裏書〕「江城図」

〔形態〕量物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕縹色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕六四・〇×七八・〇糎(折畳時一八・三×一二・八糎)

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「明治十四年献本」、「大日本帝国図書印」、「日本政府図書」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 三六一六〇号

〔備考〕手書彩色

【解題】

江戸城及びその周辺の内廓部分を描いた絵図。絵図の内容年代は不明。裏書に「江城図」とあり、その上から表紙が貼り付けられている。「武州江城図」と記された表紙の外題の下部には、「乗命」と朱書きされている。本丸と二丸部分には、朱筆で御殿の形状等についての書き込みがある。「日本分国絵図」は、享保期頃(一七一六〜一七三六)に美濃国岩村藩において調整され、同藩主が代々伝えてきた資料で、明治六年(一八七三)に最後の藩主松平乗命が明治政府の要請に応じて献納した(『内閣文庫百年史』)。明治六年の献納と伝わるが、印記には「明治十四年献本」とある。

〔四〕江戸城二丸図 〔請求番号〕一七七・〇三四〇

【書誌】

〔外題〕「江戸城二丸図 明治十七年摸写」（中央双辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕金茶色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕三五・五×三八・〇糎（折畳時一八・〇×一三・〇糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「外務省図書印」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕外務省

〔旧番号〕和書 一二一九七号

〔備考〕手書彩色、雲母引

【色凡例】

（桃色）此色二階

【解題】

江戸城二丸の表と奥を描いた絵図。表、奥、大奥のほか、庭や御殿周囲の多門櫓等を含む。表には、「老中」、「若年寄」、「御側御用人」、「表右筆」、「奥右筆」等の下部屋や執務室がみられる。二階がある場合は桃色、一階

のみの場合は黄色となっており、色によって一階建てと二階建てが見分けられるように描かれている。明治一七年（一八八四）に模写された。後掲の〔五〕「江戸城本丸西丸絵図」（請求番号一七七・〇三四一）と同時期に模写されたものとみられる。〔二一〕「江戸御城二ノ丸総御殿向之図」（一八三・〇七一）、〔二六〕「江戸城二丸御絵図」（一八三・〇八三四）と類似の絵図。本図の年代については、〔一六〕「江戸城二丸御絵図」の解題参照。

〔五〕江戸城本丸西丸図 「請求番号 一七七・〇三四一」

【書誌】

〔外題〕「江戸城本丸西丸図 明治十七年摸写」（中央双辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕金茶色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕三八・〇×四九・〇糎（折畳時一七・八×一三・〇糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「外務省図書印」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕外務省

〔旧番号〕和書 一二一九八号

〔備考〕手書彩色、雲母引

【解題】

江戸城の本丸、二丸、三丸、西丸、紅葉山を含む領域を描いた絵図。赤色で動線が書き込まれている。明治一七年（二八八四）に模写されており、前掲の〔四〕「江戸城二丸図」（請求番号一七七・〇三四〇）と同時期に模写されたものとみられる。紅葉山には、六代將軍徳川家宣の御霊屋が存在することから、七代將軍家継以降の江戸城を描いた絵図と推測される。

〔六〕西丸表向御畳目並御絵附之図 「請求番号 一七七・〇三五九」

【書誌】

〔外題〕「西丸表向御畳目并御絵附之図」（中央双辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕金茶色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕五〇・〇×六四・〇糎（折畳時一八・〇×一三・〇糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「外務省図書印」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕外務省

〔旧番号〕和書 一二二九一号

〔備考〕雲母引

【解題】

江戸城西丸の御殿の表を描いた絵図。大広間から白書院までの領域が描かれていることから、元治度の再建以前の状況を描いた絵図とみられる（元治度再建の西丸は、白書院に代わり黒書院が建てられた）。柱の位置が示され、朱筆で畳目が記されている。また、障壁画の絵様に関する情報も記載される。建築図面として作成されたものか。

〔七〕宮城内外之図 「請求番号 一七七・〇五四六」

【書誌】

〔外題〕「宮城内外之図」（中央無辺題簽に墨書）

〔内題〕「宮城内外之図」

〔裏書〕「宮城内外之図 五千分ノ一尺」

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕金茶色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕四七・四×三七・二糎（折畳時二四・〇×一八・八糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕五千分一ノ尺

〔印記〕「内閣文庫」、「土倫曾蔵」（長沢規矩也蔵書印）

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕不明

〔旧番号〕和書 七四八七九号

〔備考〕石版「近衛参謀部石版 陸軍工兵曹長石田茂雄製図」

年代について、『改訂 内閣文庫国書分類目録』には明治二十二年（一八八九）とある。

【書き入れ】

・ 平常復哨

・ 平常単哨

上 非常一分隊

○ 同 復哨

□ 同諸配備残数悉皆

【解題】

明治中期の皇居周辺図。陸軍参謀部による石版印刷物。旧江戸城の本丸、西丸、二丸、三丸、紅葉山、吹上等の跡地に、明治期以後、どのような建物が建設されたのかを知ることができる。明治二十二年（一八八九）一〇月に竣工した「宮内省」や「近衛」の建物が存在することから、これ以後に作成された図とみられる。図は、使用者によって、皇居警衛に関する情報が赤字で書き込まれている（【書き入れ】）。

〔八〕南御休息絵図面 「請求番号 一八三・〇六九五」

【書誌】

〔外題〕「南御休息絵図面」（中央双辺題簽に墨書）

〔内題〕「南御休息絵図面」

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕焦茶色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕三八・五×五三・八糎（折畳時一九・一×九・〇糎）

〔年代記載〕「明治八年三月」

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「大日本帝国図書印」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 二七五五六号

〔備考〕手書彩色、雲母引、付箋あり

【書き入れ】

深谷栄真以蔵所

縮写

明治八年三月 課長岡谷繁實督（印）校合 吉村蔵（印）

林八郎（印）

※吉村蔵の「蔵」は異体字で記されているが、表記が困難なため、常用

漢字に直した。

【解題】

南御休息付近の絵図。明治八年（一八七五）に模写されたもの。後掲〔九〕「柳営表向之図」（請求番号一八三・〇六九六）と同時期に模写されている。江戸城の絵図で、奥と大奥の境付近の絵図とみられるが、どの御殿の絵図であるか、いつ頃の状況を描いた絵図なのか、詳細は不明。

〔九〕柳営表向之図 「請求番号 一八三・〇六九六」

〔外題〕「柳営表向之図」（中央双辺題簽に墨書）

〔内題〕「柳営表向之図」

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕焦茶色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕三八・二×五三・八糎（折畳時一九・二×九・二糎）

〔年代記載〕「明治八年三月」

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「大日本帝国図書印」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 二七五五五号

【備考】手書彩色、雲母引

【書き入れ】

深谷栄真以蔵所

縮写

明治八年三月 課長岡谷繫實督（印）校合 吉村巖（印）

林八郎（印）

※吉村巖の「巖」は異体字で記されているが、表記が困難なため、常用漢字に直した。

【解題】

江戸城本丸御殿の表向の絵図。明治八年（一八七五）に模写されたもの。前掲〔八〕「南御休息絵図面」（請求番号一八三・〇六九五）と同時期に模写されている。絵図には障壁画の絵様に関する記載がある。表右筆と奥右筆の下部屋があり、奥右筆の創設が天和元年（一八六一）であることから、江戸時代中期以降の御殿を描いた絵図と考えられる。

〔一〇〕御本丸御殿表御座敷之絵図 「請求番号 一八三・〇七〇五」

【書誌】

〔外題〕「柳営之図」（左肩無辺題簽に墨書）

〔内題〕「御本丸御殿表御座敷之絵図」

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕浅葱色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕二七・四×三七・〇糎（折畳時一八・五×一三・八糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「浅草文庫」、「日本政府図書」、「多湖有里文庫」（多湖実成蔵書印）

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕不明

〔旧番号〕和書 一七〇四八号

〔備考〕手書彩色、虫損部修復跡あり

【解題】

江戸城本丸御殿の表向の絵図。年代不詳。大広間、白書院、黒書院等の儀礼が行われる場、及び大名や旗本の殿中席となる部屋は、赤い線が格子状に引かれている（畳目を示すと思われる）。一方、中之口や納戸口の諸役人の下部屋、及び勘定所等の諸役人が執務を行う場合は黄色が塗られている。

〔一一〕江戸御城二ノ丸総御殿向之図 「請求番号 一八三・〇七一一」

【書誌】

〔外題〕「江戸御城二ノ丸惣御殿向之図」（左肩無辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕浅葱色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕三五・六×五〇・一糎（折畳時二五・〇×一七・七糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「浅草文庫」、「日本政府図書」、「多湖有里文庫」（多湖実成蔵書印）

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕不明

〔旧番号〕和書 一七〇五〇号

〔備考〕手書彩色

【色凡例】

（桃色）此色二階

【解題】

江戸城二丸の表と奥が描かれた絵図。表、奥、大奥のほか、庭や御殿周囲の多間櫓等も含む。表には、「老中」、「若年寄」、「御側御用人」、「表右筆」、「奥右筆」等の下部屋や執務室がみられる。二階がある場合は桃色、一階のみの場合は黄色となっており、色によって一階建てと二階建てを描き分けている。〔四〕「江戸城二丸図」（請求番号一七七・〇三四〇）、〔二六〕「江戸城二丸御絵図」（一八三・〇八三四）と類似の絵図。本図の年代について

は、〔二六〕「江戸城二丸御絵図」の解題参照。

〔二二〕江戸御殿之図 「請求番号 一八三・〇七一三」

【書誌】

〔外題〕「江戸御殿之図 単」（中央双辺題簽に墨書）

〔内題〕「江戸御殿之図」

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕金茶色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕七三・八×九六・〇糎（折畳時二六・一×一八・三糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「日本政府図書」、「大日本帝国図書印」、「明治十五年購求」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 二八一四二号

〔備考〕手書彩色

【色凡例】

（緑色）此色御作事場所

（桃色）此色小細工方場所

（黄色）此色御縁側

（黄緑色）此色土手芝

（青色）此色水

（丸印）此圏銅水留鉢

【解題】

江戸城本丸御殿の表と奥が描かれた絵図。絵図の余白には畳表と畳縁に関する一覽がイロハ順で記されている。御殿内の各部屋には一覽に基づいて「イ」、「ロ」等と書き込まれるほか、畳の枚数も記されており、各部屋の畳表と畳縁の種類、畳の枚数を知ることができる。「御鈴廊下」が二本みられるほか、「御側御用人衆」の下部屋が老中口（納戸口）にあり、詰所が奥に存在する。御鈴廊下が二本となるのは明暦以後（一六五五）のこととされ、さらに九代家重のはじめころまでは一本のみであった可能性も指摘されている（深井雅海『図解・江戸城をよむ』）。また、「御側御用人」という名称が公式記録に表れるのは吉宗政権期以降であることから、江戸時代中後期以降の本丸御殿を描いた絵図と考えられる。

〔二三〕江戸御本丸大御奥御殿向図 「請求番号 一八三・〇七一五」

【書誌】

〔外題〕「江戸御本丸大御奥御殿向図」（中央無辺題簽に墨書）

〔内題〕「江戸御本丸大御奥御殿向図」

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕浅葱色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕八〇・〇×一一五・〇糎（折畳時二七・〇×一九・八糎）

〔年代記載〕「文久三亥年三月中旬写之 橋実成」

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「浅草文庫」、「日本政府図書」、「内閣文庫」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕不明

〔旧番号〕和書 一七〇四九号

〔備考〕虫損部修復跡あり

【解題】

江戸城本丸大奥の絵図。文久三年（一八六三）三月中旬に橋実成が写したものの。絵図面には「新御殿」との記載があり、御鈴廊下は「御鈴廊下」（上御鈴廊下）と「新御鈴廊下」（下御鈴廊下）の二本が描かれている。大奥の西南隅、上御鈴廊下から大奥に入ったところに、將軍の大奥来訪時の寢所である御小座敷があるが、本図では形のみが描かれ、部屋名は記されていない。服部佐智子、篠野志郎によれば、弘化度以降の本丸大奥には、「新座敷」、「御祐筆間」、「老之御殿」等が存在する（服部佐智子・篠野志郎「江戸城本丸御殿大奥御殿向における殿舎構成の変遷と空間構成について」）。本図では、「新座敷」と「御祐筆間」は確認できないが、「老之御殿」は描かれており、弘化度以前と以後の状況が混在するという矛盾が生じている。新御殿は一代將軍徳川家斉の頃から存在し、御鈴廊下は少なくとも天保一二年（一八四一）には二本存在したとみられることから（小粥祐

子『江戸城のインテリア』）、一代將軍家斉〜二代將軍家慶以降の絵図であろう。なお、下御鈴廊下が「新御鈴廊下」と記されていることから、下御鈴廊下が設けられてから間もない時期の絵図か。

〔一四〕柳宮起絵図 「請求番号 一八三・〇七一七」

【書誌】

〔外題〕①「柳宮起絵図 白書院」

②「柳宮新御殿起絵図 狩野永真原本写」

③「柳宮起絵図 虎之間」

（いずれも中央双边無辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕三鋪

〔表紙〕朽葉色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕①六五・三×七二・六糎（折畳時二七・四×一九・二糎）、②

三九・〇×四九・六糎（折畳時二七・五×一九・五糎）、③五三・

五×七六・〇糎（折畳時二七・三×一九・二糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「大日本帝国図書印」①、②、③、「日本政府図書」②、③

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 二八七三九号

〔備考〕雲母引、虫損部修復跡あり

【解題】

天保一五年（一八四四）五月に江戸城本丸御殿が全焼し、翌弘化二年（一八四五）二月に再建されるが、その再建した本丸御殿の内、白書院、大奥新御殿、虎之間の起絵図（おこしえず）が本図である。起絵図とは、建物の折り畳み式の立体模型のことで、壁面を立てて起こせば立体模型となるが、折り畳めば平面となる。なお、本図と対応する障壁面の縮図（「柳宮御白書院虎之間新御殿御休息伺下絵」三軸〈請求番号一八三・〇八四六〉も当館に所蔵されている。これについては、『北の丸』五〇号（星瑞穂「当館所蔵の「絵入り本」解題（6）」）に解題があるので、そちらを参照されたい。

〔一五〕江戸城二丸表御殿向絵図 「請求番号 一八三・〇八二八」

【書誌】

〔外題〕二丸表 御殿向絵図（中央無辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕浅葱色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕一八五・五×一六八・〇糎（折畳時二七・〇×二一・二糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「内閣記録課」、「日本政府図書」、「大日本帝国図書印」、「明治十年購求」

〔収納容器〕袋（天地あき） 浅葱色 二七・〇×二一・六糎

「二丸表御殿向絵図」（中央無辺題簽に墨書）

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 一七〇四七号

〔備考〕手書彩色、修復跡あり

【色凡例】

（黄色）御殿向二階無之分

（桃色）御殿向二階家之分

（橙色）御作事方持場

【解題】

二丸御殿の絵図。二丸御殿周囲の多聞櫓等も含めて描かれているが、建物の内部構造が描かれているのは、二丸御殿の表と奥のみで、大奥部分は空白となっている。表には、「老中」、「若年寄」、「御側御用人」、「御側衆」、「表右筆」、「奥右筆」等の執務室がみられる。また、御風呂屋口付近には、銅塀によって囲まれ、周囲と区別された空間が存在する。なお、先行研究においては、宝永度の御殿ではないかと推測されている（内藤昌「江戸の都市と建築」、平井聖監修・伊東竜一著『城郭侍屋敷古図集成 江戸城Ⅰ（城郭Ⅱ）』）。

〔一六〕江戸城二丸御絵図 「請求番号 一八三・〇八三四」

【書誌】

〔外題〕二丸御絵図（左肩無辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕砥粉色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕二四八・五×二四四・五糎（折畳時三二・五×二二・〇糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「浅草文庫」、「日本政府図書」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕不明

〔旧番号〕和書 四二四一九号

〔備考〕手書彩色

【色凡例】

（橙色）此色二階家

【解題】

二丸御殿の絵図。表、奥、大奥のほか、庭や御殿周囲の多聞櫓等も含む領域が描かれている。表には、「老中」、「若年寄」、「御側御用人」、「表右筆」、「奥右筆」等の下部屋や執務室がみられる。二階がある場合は橙色、一階のみ場合は黄色となっており、色によって一階建てと二階建てを区別している。本絵図は、従来、寛永二〇年（一六四三）の御殿とされていたが（内藤昌「江戸の都市と建築」、平井聖監修・伊東竜一著『城郭侍屋敷古図集成 江戸城Ⅰ（城郭）』）、畑尚子氏は、「御側御用人」の記載等から、宝暦一〇年（一七六〇）に二丸御殿が新造された際の絵図ではないかとしている（畑尚子「江戸城二丸御殿」）。（四）「江戸城二丸図」（請求番号一七七・〇三四〇）、（一一）「江戸御城二ノ丸総御殿向之図」（一八三・〇七一）も類似の絵図。

〔一七〕江戸城御天守絵図 「請求番号 一八三・〇八四一」

【書誌】

〔外題〕①「五十分一 御天守妻北割」

②「五十分一 御天守平地割」

③「御天守絵図」

（いずれも左肩無辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕三鋪

〔表紙〕なし

〔料紙〕間似合紙

〔サイズ〕①一三二・七×九三・九糎（折畳時三三・四×二三・七糎）

②一三二・四×九八・二糎（折畳時三三・三×二四・八糎）

③三三・三×二五三・〇糎（折畳時三三・四×一八・二糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕①②「五十分一」、③なし

〔印記〕「秘閣図書之章」、「日本政府図書」、「内閣文庫」

〔収納容器〕

A 四方帙 代赭色 三五・五×二六・〇糎

〔御天守絵図地割 三枚〕（中央双辺題簽に墨書）

明治以後に保存用につけられたものとみられる。

B 袋 楮紙 三二・五×二五・〇糎

〔御天守絵図地割〕（中央無辺題簽に墨書）

当初の保存容器とみられる。題簽の下の「三枚」（後筆）との記載がある。

〔旧蔵者〕紅葉山文庫

〔旧番号〕和書 三二四八五号

〔備考〕手書彩色、継目補強、付箋あり ①、③

【解題】

江戸城の天守閣は、寛永一五年（一六三八）に造営されるが、明暦三年（一六五七）の大火で焼失した。正徳二年（一七一二）、新井白石らによって天守閣の再建計画が提出されるが、本図はそのときの計画案の図面である。天守閣の妻側（①）、平側（②）、内部構造（③）の三点の図面が残されている。

〔一八〕江戸城図 〔請求番号 二六二・〇一三〕

【書誌】

〔外題〕なし

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕一枚物

〔数量〕一枚

〔表紙〕なし

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕三七・二×五四・二糎

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「遠藤政寛図書」、「内閣文庫 IMPERIAL CABINET LIBRARY」
（プレス印）

〔収納容器〕筒「江戸城図面（複製）」

〔旧蔵者〕不明

〔旧番号〕和書 七七四四六号

〔備考〕複製、昭和三八年（一九六三）刊

【解題】

江戸城の本丸、西丸、二丸、三丸、紅葉山を含む領域を描いた絵図。複製物のようだが、複製元の資料については不明。本図には「二ノ丸明地」、

「三ノ丸明地」との記載がある。二丸は延享四年（一七四七）に焼失し、宝暦一〇年（一七六〇）に再建され、三丸は元文三年（一七三八）に撤去されている。また、紅葉山には七代將軍徳川家継までの御霊屋を確認することができる。これらの記載から、本絵図の内容年代は、二丸が焼失した延享四年（一七四七）から八代將軍吉宗が死去した寛延四年（宝暦元年、一六五一）までの間であると推測される。

〔一九〕江戸城図 「請求番号 二六六・〇一一三」

【書誌】

〔外題〕「江戸城図 同門図」（中央無辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕砥粉色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕三九・五×五四・六種（折畳時一九・八×二四・一種）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「内閣文庫」、「土倫曾藏」（長沢規矩也蔵書印）、「静盒蔵書」（長沢規矩也蔵書印）

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕不明

〔旧番号〕和書 七六二四四号
 〔備考〕手書彩色、虫損部修復跡あり。

【絵図左下の記載】

大手門御門	御諸代大名
西丸大手御門	拾万石以上
内桜田御門	御譜代大名
外桜田御門	同
竹橋御門	同
二丸銅御門	大番頭
御玄関前御門	御書院番頭
塩見坂御門	御留守□□□□ _{虫損}
中ノ御門	御持筒頭
百人組御番所	百人組之頭
中仕切御門	二丸御留守居
喰違御門	
下梅林御門	御先手
平川御門	同
蓮池御門	同
紅葉山御門	同
坂下御門	同
大手方御防	御諸代大名
桜田方御防	同
二丸方	同
楓山	同

吹上 同

【解題】

江戸城の本丸、西丸、二丸、三丸、紅葉山を含む領域を描いた絵図。石垣や門、櫓等の描写は細かく、例えば、各門や櫓の屋根の両端には鯨鉾が描かれ、櫓は二重櫓と三重櫓が区別して描かれている。一方で、御殿は名称が記されるのみで建造物は描かれていない。内桜田門の門前には下馬札が立てられている。絵図左下には各門の警備担当が記される。天守閣の位置には、天守台のみで天守閣は描かれていない。江戸城の天守閣は、明暦三年（一六五七）の大火で焼失し、以後再建されていないことから、明暦三年以後の江戸城を描いた絵図と推測される。

〔二〇〕 明治初年大手門外図 「請求番号 二六六・〇一一四」

【書誌】

- 〔外題〕 「明治初年大手門外図」（中央無辺題簽に墨書）
- 〔内題〕 なし
- 〔裏書〕 「明治初年大手門外図」（鉛筆書き）
- 〔形態〕 畳物
- 〔数量〕 一鋪
- 〔表紙〕 砥粉色
- 〔料紙〕 楮紙
- 〔サイズ〕 七〇・〇×九〇・〇 糎（折畳時二三・二×一八・二 糎）
- 〔年代記載〕 なし

〔縮尺記載〕 なし

〔印記〕 「内閣文庫」、「士倫曾蔵」（長沢規矩也蔵書印）

〔収納容器〕 なし

〔旧蔵者〕 不明

〔旧番号〕 和書 七六二四五号

〔備考〕 手書彩色

【解題】

明治初期の江戸城大手門外、大名小路周辺の図。明治政府は旧大名の屋敷を接収し、新政府の施設に転用したが、本図は屋敷の接収状況のほか、諸施設が元は誰の屋敷であったのか等が記されている。「公議所」との記載があることから、明治二年（一八六九）に作成された図とみられる。

〔二一〕 旧幕府郭内道路地図 「請求番号 二六六・〇一一五」

【書誌】

- 〔外題〕 「旧幕府郭内道路地図 全」（中央無辺題簽に墨書）
- 〔内題〕 なし
- 〔裏書〕 なし
- 〔形態〕 畳物
- 〔数量〕 一鋪
- 〔表紙〕 黄檗色
- 〔料紙〕 楮紙
- 〔サイズ〕 一〇八・五×一〇二・五 糎（折畳時二五・〇×一八・三 糎）

〔二二〕〔江戸城図〕 「請求番号 寄託〇〇一六五一〇〇」

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「内閣文庫」、「土倫曾蔵」（長沢規矩也蔵書印）

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕不明

〔旧番号〕和書 七六二四六号

〔備考〕手書彩色、雲母引、虫損修復跡あり

【書誌】

〔外題〕なし

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕一枚物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕なし

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕八一・五×七七・五糎

〔年代記載〕「弘化二乙巳年七月十四日」

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕なし

〔収納容器〕なし

〔所蔵者〕上松徹

〔備考〕寄託資料（上松徹所蔵文書）、手書彩色、裏打あり

【解題】

明治前期の旧江戸城郭内の道路を描いた図（大名小路等を含む）。町割が書き込まれており、記載のある町は、祝田町、寶田町、元千代町（元千代田町）、有楽町、八重洲町、永楽町、元衛町、竹平町、錢瓶町である。省庁名の書き込みもあり、内務省、大蔵省、農商務省、警視庁、司法省、元老院等の記載がある。道路によって色分けされており、凡例が付されている。農商務省の設置は明治一四年（一八八二）であり、元老院は明治三三年（一八九〇）に廃止されているので、この絵図は明治一四年〜同二三年頃の様子を描いた絵図と考えられる。

【書き入れ①】（城郭図）

外 外桜田御門

内 内桜田御門

下 下乗橋

平 平川御門

竹 竹橋

坂 坂下御門

大 大手御門
西 西丸大手御門
朱 朱入有分番所外二番所も有

【書き入れ②】(城郭図)(朱筆)

●御玄関諸御大名御上り

●御台所口御老若御側衆御小姓御小納戸

●中ノ口諸御役人

【書き入れ③】(城郭図)

福嶋氏—小田氏—神田氏—

【書き入れ④】(城郭図)

右巻巻他見可為無用者也神田氏より借用写之

弘化二乙巳年七月十四日

【解題】

江戸城の城郭図と御殿図の二枚の絵図を貼り合わせ、一枚としている。城郭図は、本丸、西丸、二丸、三丸、紅葉山を含む領域が描かれている。朱筆による書き込みがあり、大名や諸役人の登城口に印がつけられ、登城ルートと思しき動線が引かれている【書き入れ②】。絵図の余白に記された書き入れによれば、弘化二年(一八四五)に神田氏から借用して、書写したものであるという【書き入れ④】。また、「福嶋氏—小田氏—神田氏—」と記されており【書き入れ③】、書写ないし伝来の過程を示しているものと推測される。御殿図は本丸表向の図で、各間の名称や障壁面の絵様

が記されている。「時計之間」の西側は御用部屋が存在するはずであるが、本図では「御膳立之間」となっている等、実際の御殿の構造と合わない点がいくつかあり、黒書院付近と御座之間付近が融合したような図となっている。

〔二三〕江戸御城図 「請求番号 寄託〇〇一六六一〇〇」

【書誌】

〔外題〕なし

〔内題〕なし

〔裏書〕江戸御城図

〔形態〕一枚物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕なし

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕四一・六×五六・〇糎

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕なし

〔収納容器〕なし

〔所蔵者〕上松徹

〔備考〕寄託資料(上松徹所蔵文書)、手書彩色、裏打あり

【解題】

江戸城の内郭部分（大名小路含む）を描いた絵図。石垣や堀の形が詳細に描かれ、各橋や門にはその名称が記されている。御殿は「御本丸」「西ノ丸」等、名称が記載されるのみで建造物は描かれてない。紅葉山に「御宮」（元和四年（一六一八）建立）との記載があること、石垣や堀の形から見て二丸拡張工事（寛永一二年（一六三五）後であることから、少なくとも寛永期以降の様子を描いた絵図と考えられる。

〔二四〕〔出火之節登城図〕 〔請求番号 寄託〇〇一六七一〇〇〕

【書誌】

- 〔外題〕なし
- 〔内題〕なし
- 〔裏書〕なし
- 〔形態〕一枚物
- 〔数量〕一鋪
- 〔表紙〕なし
- 〔料紙〕楮紙
- 〔サイズ〕二六・二×三七・八糎
- 〔年代記載〕なし
- 〔縮尺記載〕なし
- 〔印記〕なし
- 〔収納容器〕なし
- 〔所蔵者〕上松徹
- 〔備考〕寄託資料（上松徹所蔵文書）、刷物か

【色凡例】

- （綠色）此色之場所出火有之候節者、御老中方若年寄衆被仰合無之、御登 城有之候事
- （橙色）此色之場所出火有之候節者、御老中方若年寄衆被仰合之上、御登 城有之候事

【解題】

江戸城付近で出火が起こった際、登城に関する情報を記した絵図。およそ天保く安政年間（一八三〇〜一八五九）にかけて、老中や若年寄を務めた人物の名がみえる。嘉永二年（一八四九）の「御江戸大名小路絵図」（徳川林政史研究所蔵）に記された各大名の屋敷地と本絵図に記されたそれがほぼ一致することから、嘉永二年前後の状況を描いた絵図と推測される。

〔二五〕〔江戸城〕御本丸殿中之図 〔請求番号 寄託〇〇一七〇一〇〇〕

【書誌】

- 〔外題〕なし
- 〔内題〕なし
- 〔裏書〕なし
- 〔形態〕一枚物
- 〔数量〕一鋪
- 〔表紙〕なし
- 〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕五五・〇×七九・八糎

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕なし

〔収納容器〕袋 楮紙 二八・八×三四・〇糎（広げた状態）

〔御本丸殿中之図 大菅氏〕

〔所蔵者〕上松徹

〔備考〕寄託資料（上松徹所蔵文書）、継目剥離

【解題】

江戸城の本丸御殿表向の絵図。将軍の御成ルート、大名・諸役人の詰所や登城口の情報が詳細に書き込まれている。将軍の着座位置や諸大名の詰所は各種の記号で示され、細かい凡例が付されている。納戸口には、寛延〜宝暦年間（一七四八〜一七六三）にかけて老中や若年寄を務めた人物の名が記されている。また、御風呂屋口には「御両卿様登城」との記載があり、御三卿は本図が作成された時点では二家のみであったことがわかる。

田安家が享保一六年（一七三一）、一橋家が寛保元年（一七四一）、清水家が宝暦九年（一七五九）に創立されている。納戸口の下部屋には、「本多伯耆守」とあり、延享三年（一七四六）から宝暦八年（一七五八）まで老中を務めた本多正珍とみられる。以上の情報から、本絵図の内容年代は、本多正珍が老中を務めた延享三年〜宝暦八年の間と考えられる。

〔主な参考文献〕

内藤 昌「江戸の都市と建築」諏訪春雄・内藤昌編著『江戸図屏風』毎日新聞社、一九七二年。

『日本名城集成 江戸城』小学館、一九八六年。

国立公文書館『内閣文庫百年史 増補版』汲古書院、一九八六年。

平井聖監修・伊東竜一著『城郭侍屋敷古図集成 江戸城Ⅰ（城郭）』至文堂、一九九二年。

一九九二年。

深井雅海『図解・江戸城をよむ』原書房、二〇〇三年。

大石学編『江戸幕府大事典』吉川弘文館、二〇〇九年。

服部佐智子・篠野志郎「江戸城本丸御殿大奥御殿向における殿舎構成の変遷と空間構成について」『日本建築学会計画系論文集』第七四巻第六四

一号、二〇〇九年七月。

小粥祐子『江戸城のインテリア』河出書房新社、二〇一五年。

畑 尚子「江戸城二丸御殿」『東京都江戸東京博物館紀要』第五号、二〇一五年三月。

高橋喜子・小宮山敏和「各所蔵館の史料群の概要（五）国立公文書館」『研究成果報告書 東京大学史料編纂所附属画像史料解析センタープロジェクト「江戸城図・江戸図・交通図および関連史料の研究」（代表 杉本史子） 東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点一般共同研究「江戸城本丸御殿平面図・間取図の収集と研究資源化に関する研究」（代表 小粥祐子）』（二〇一九年）。

（調査員）